

手袋を買いに

新美 南吉

寒い冬が北方から、狐の親子のすんでいる森へもやってきました。

ある朝洞穴から子供の狐が出ようとしたが、

「あっ。」と叫んで目を押さえながら母さん狐のところへ転がってきました。

「母ちゃん、目に何か刺さった、抜いてちょうだい早く早く。」と言いました。

母さん狐がびっくりして、慌てふためきながら、目を押さえている子供の手を恐る恐る取りのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐は洞穴の入り口から外へ出て初めてわけがわかりました。昨夜のうちに、真っ白な雪がどっさり降ったのです。その雪の上からお日様がキラキラと照らしていたので、雪はまぶしいほど反射していたのです。雪を知らなかった子供の狐は、余り強い反射を受けたので、目に何か刺さったと思ったのでした。

子供の狐は遊びに行きました。真綿のように柔らかい雪の上を駆け回ると、雪の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がすっと映るのです。

すると突然、後ろで、

「どたどた、ざーっ。」とものすごい音がして、パン粉のような粉雪が、ふわーっと子供狐におっかぶさってきました。子供狐はびっくりして、雪の中に転がるようにして十メートルも向こうへ

逃げました。なんだろうと思って振り返って見ましたが何もいませんでした。それは樅の枝から雪がなだれ落ちたのでした。まだ枝と枝の間から白い絹糸のように雪がこぼれていました。

まもなく洞穴へ帰ってきた子供狐は、

「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする。」と言って、ぬれて牡丹色になった両手を母さん狐の前に差し出しました。母さん狐は、その手に、は——と息を吹っかけて、ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、

「もうすぐ暖かくなるよ、雪を触ると、すぐ暖かくなるもんだよ。」と言いましたが、かあいい坊やの手に霜焼けができてはかわいそうだから、夜になったら、町まで行って、坊やのお手々に合うような毛糸の手袋を買ってやろうと思いました。

暗い暗い夜が風呂敷のような影を広げて野原や森を包みにやってきましたが、雪は余り白いので、包んでも包んでも白く浮かびあがっていました。

親子の銀狐は洞穴から出ました。子供のほうはお母さんのおなかの下へ入り込んで、そこからまんまるな目をぱちぱちさせながら、あっちゃこっちを見ながら歩いていきました。

やがて、行く手にぼつり明かりが一つ見え始めました。それを子供の狐が見つけて、

「母ちゃん、お星様は、あんな低い所にも落ちてるのねえ。」とききました。

「あれはお星様じゃないのよ。」と言って、そのとき母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯なんだよ。」

その町の灯を見たとき、母さん狐は、あるとき町へお友達と出かけていって、とんだめに遭ったことを思い出しました。およしなさいって言うのもきかないで、お友達の狐が、ある家のあひるを盗もうとしたので、お百姓に見つかって、さんざ追いまくられて、命からがら逃げ

1 【樅】山野に生える常緑高木。

4 【牡丹色】鮮やかな赤紫色。

5 【ぬくとい】暖かい。

7 【かあいいい】かわいい。

8 【霜焼け】寒さで血行が悪くなり、手足の先や耳などが腫れてかゆくなること。

20 【百姓】「農民」「農家」の古い言い方。

たことでした。

「母ちゃん何してんの、早く行こうよ。」と子供の狐がおなかの下から言うのでしたが、母さん狐はどうしても足が進まないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

「坊やお手々を片方お出し。」とお母さん狐が言いました。その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、かわいいた人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐はその手を広げたり握ったり、つねってみたり、嗅いでみたりしました。

「なんだか変だな母ちゃん、これなあに？」と言って、雪明かりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表に円いシャッポの看板のかかっている家を探すんだよ。それが見つかったらね、トントンと戸をたたいて、こんばんはって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこし戸を開けるからね、その戸の隙間から、こっちの手、ほらこの人間の手を差し入れてね、この手にちょうどいい手袋ちょうだいって言うんだよ、わかったね、決して、こっちのお手々を出しちゃだめよ。」と母さん狐は言いよかせました。

「どうして？」と坊やの狐は聞き返しました。

「人間はね、相手が狐だとわかると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、捕まえて檻の中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとに怖いものなんだよ。」

「ふーん。」

「決して、こっちの手を出しちゃいけないよ、こっちのほう、ほら人間の手のほうを差し出すん

だよ。」と言って、母さんの狐は、持ってきた二つの白銅貨を、人間の手のほうへ握らせてやりました。

子供の狐は、町の灯をめぐって、雪明かりの野原をよちよちやって行きました。始めのうちは一つきりだった灯が二つになり三つになり、果ては十にも増えました。狐の子供はそれを見て、灯には、星と同じように、赤いのや黄いのや青いのがあるんだなと思いました。やがて町に入りましたが通りの家々はもうみんな戸を閉めてしまって、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちてはいるばかりでした。

けれど表の看板の上にはたいい小さな電灯がともっていたので、狐の子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車の看板や、眼鏡の看板やその他いろんな看板があるものは、新しいペンキで描かれ、あるものは、古い壁のようにはげていましたが、町に初めて出てきた子狐にはそれらのものがあったいなんであるかわからないのでした。

どうとう帽子屋が見つかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電灯に照らされて掛かっていました。

子狐は教えられたとおり、トントンと戸をたたきました。

「こんばんは。」

すると、中では何かこと音かしていましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリと開いて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、間違ったほうの手を、——お母様が出しちやいけないと言ってよくよかせたほうの手を隙間から差し込んでしまいました。

「このお手々にちょうどいい手袋ください。」

11 【シャッポ】「帽子」の古い言い方。

1 【白銅貨】銅とニッケルの合金で作った貨幣。

12 【シルクハット】洋装で、正装するときにかぶる男性用の帽子。

16 【一寸】約三・〇三センチメートル。

すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれというのは。これはきつと木の葉で買いに来たんだなと思いました。そこで、

「先にお金をください。」と言いました。子狐は素直に、握ってきた白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差し指の先に載っけて、カチ合わせてみると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんのお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋を取り出してきて子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐ろしいものだっておっしゃったがちつとも恐ろしくないや。だって僕の手を見てもどうもしなかったもの。」と思いました。けれど子狐はいったい人間なんてどんなものか見たいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声がしていました。なんとという優しい、なんとという美しい、なんとというおっとりした声なんでしょう。

「眠れ 眠れ

母の胸に、

眠れ 眠れ

母の手に――」

子狐はその歌声は、きつと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子狐が眠るときにも、やっぱり母さん狐は、あんな優しい声で揺すぶってくれるからです。

すると今度は、子供の声がありました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いって泣いてるでしょうね。」

20

すると母さんの声が、
「森の子狐もお母さん狐のお歌を聴いて、洞穴の中で眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きつと坊やのほうが早くねんねしますよ。」
それを聞くと子狐は急にお母さんが恋しくなって、お母さん狐の待っている方へ跳んでいきました。

5

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰ってくるのを、今か今かと震えながら待っていましたので、坊やが来ると、暖かい胸に抱きしめて泣きたいほど喜びました。

二匹の狐は森の方へ帰っていききました。月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足跡には、コバルトの影がたまりました。

10

「母ちゃん、人間ってちつとも怖くないや。」

「どうして?」

「坊、間違えて本当のお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、捕まえやしなかったもの。ちゃんとこない暖かい手袋くれたもの。」

と言って手袋のはまった両手をパンパンやってみせました。お母さん狐は、

「まあ!」とあきれましたが、「本当に人間はいいものかしら。本当に人間はいいものかしら。」とつぶやきました。

15

【著者】新美 南吉（にいみ なんきち）

一九二三（大正二）年—一九四三（昭和一八）年

児童文学作家。愛知県の生まれ。

【著書】『こん狐』、『てんでんむしのかなしみ』、『おじいさんのランプ』など